

## 06-52

### 家族のニーズを考慮した保育日誌の見直し

成田赤十字病院 NICU

○飯田 恵美、岡田 瀬里奈、阿比留 美也子、中川 仁知子

【はじめに】当NICUでは児と家族間の愛着形成のため、毎日スタッフが児の様子を写真撮影しコメントした保育日誌を家族へ渡している。保育日誌は、受け取る家族にとっては有意義なものであるが、スタッフにとっては多忙な業務の1つでもある。また、慢性期にある児は内容がマンネリ化している現状がある。そこで、家族のニーズとスタッフの負担軽減を考慮した保育日誌作成を目的としてこの研究に取り組んだ。

【方法】保育日誌改訂前後で家族、スタッフへアンケートを実施・評価した。

【結果】両親は毎日同じ内容でも欲しいという意見が多かったが、スタッフのコメントのみであり家族が記載されることは稀であり、一方的な保育日誌のままで良いのかという疑問が生じた。スタッフへのアンケートでは、業務が多忙な時や受け持ち児が多い時に負担を感じていた。一方で、保育日誌を仕事のやりがいとして感じている者も多かった。そこで写真撮影はイベント時のみ行い、その他は当日の受け持ちNsの判断で写真撮影することとした。ニーズが多かった体重、ミルク量は毎日記載し、保育日誌を愛着形成に向けて看護計画の一環として参加型の保育日誌にした。その結果父母、祖父母や兄弟からのコメントもみられるようになり、スタッフの業務改善にもつながった。

【考察】保育日誌にコメントする家族が増え、スタッフとのやり取りが増え不安の軽減につながった。以前は全例毎日写真撮影していたが、改定後はそれぞれの児の背景をアセスメントし、保育日誌の必要性を判断し作成するようになった。毎日写真撮影する必要がなくなり作成に要する時間も短縮できたためスタッフの負担軽減にもつながったと言える。【今後の課題】今後も保育日誌を通して家族と情報共有することで、児と家族をつなぐ支援をしていく必要がある。

## 07-8

### 赤十字病院初ソフト無償のレセコン導入 ～導入・運用のコスト削減を目指して～

置戸赤十字病院 医事課 (コンピュータ委員会)

○菅川 裕也

【背景】メーカー製レセコンの費用は多額であり、病院経営を圧迫する要因となっている。日本医師会が開発し無償で公開しているレセプトソフト「ORCA」< Online Receipt Computer Advantage >は主に診療所で利用されているが赤十字病院ではまだ導入の実績がない

【目的】「ORCA」を導入することにより1、コストパフォーマンス2、既存システム・機器との親和性3、サポート体制の効果を検討した【当院の概要】95床(療養48、一般47)外来1000人/日、医事職員(外来5人、入院2人)

【機器構成】サーバー2台(1台はミラーサーバー OS: Linux)、クライアント7台、NAS1台、プリンタ4台

【結果】1、導入時は機器購入と各ベンダーの技術開発費のみに抑えられた。また、システム更新はインターネット回線によりマスタ・プログラムを常に最新の状態でできるので、更新費用は機器購入のみであった2、オーダーリングシステム「MONET」< Matsumura Order Network >・調剤支援システム(ユニコムEX)及びカルテ検索機(マイコンカルテシステム)とのスムーズな連携が確認できた3、トラブルの際には日医総研日医IT認定サポート事業所であるベンダーの、サポートセンターによる電話対応及びリモートメンテナンス等が迅速かつ丁寧な対応であった

【考察】メーカー製レセコンの導入及び更新の費用を比較した場合、機器及び保守費用だけで済むため長期運用で大きな経費削減効果が発生すると考えられた。また、オーダーリングシステムにおいても無償ソフトを導入しており、カスタマイズしながら当院にマッチした経済的な環境づくりが期待される

【結語】無償のソフト「ORCA」を採用することは、レセプトソフトの選択肢の一つとしてなり得る

## 07-9

### 医学管理料算定システム導入後の成果と今後の課題

京都第二赤十字病院 医事第2課

○内藤 高史、西村 和哉

【背景・目的】指導料を算定する際、紙カルテ運用時は、医事課主導で算定するようにしていた。平成23年11月の電子カルテリリースに伴い、紙カルテの運用を廃止したことにより、医師主導で指導料を算定することになった。そのため医学管理等・在宅医療(以下、指導料)の算定件数が減少した。指導料の算定ならびに医師のカルテ記載を簡潔にかつ適切に行うようにするため平成24年1月に医学管理料算定システム(以下、算定システム)を導入することになった。

【結果・考察】この算定システムは、指導料ごとに条件を設定することができ、カルテを閉じる時点でその条件を満たしておれば自動的にポップアップされ、そこで医師が記事記載し、指導料をオーダーすることができるシステムである。算定システム導入当初は診察終了時に指導料の候補がうまくポップアップされず医師のオーダーができないため、医事会計システムに指導料が反映されないことや、どの患者さんもポップアップされるため、医師から「手間がかかる」という苦情もあった。改善策として、各指導料の設定を再度見直し、また運用方法を変更し対応していった。そうすることにより、適切なポップアップ条件となり、確実に算定できるようになった。それでも全てが算定できているわけではなく、今後の更なる対応が必要である。また、導入後の算定システムに対する意見を聞くために、医師向けアンケート調査を実施した。導入前と導入後の指導料の算定件数とアンケートの結果を報告する。

## 07-10

### 固定資産管理の取り組み

松江赤十字病院 用度課

○細貝 弘人、原 敏郎、狩野 昭博

【はじめに】平成25年度に本社特別監査が実施されました。その指摘事項として「固定資産台帳と現有資産の突合」があり、約半年かけて取り組みましたので報告します。固定資産とは、その取得価額が20万円以上で耐用年数が1年以上のもので、有形と無形があります。【現状】平成24年度決算書類において、有形固定資産は医療用器械備品1148、その他の器械備品195、その他の有形固定資産24を計上していました。会計課の固定資産台帳管理番号等は現物には全く貼付されていませんでした。

【基本方針】取組を進めるうえでのコンセプトとして3つを基本にしました。1. チームで取り組む(用度課・MEセンター・会計課)。2. コストをかけない。(新たなシステム導入等をしない)。3. 取り組みを継続し精度を高める。

【方法】医療用器械備品については、MEセンターで個別に作成し貼付していたシールに固定資産台帳番号枠を新たに作り、印字できるようにした。その他器械備品等は会計課にて固定資産台帳番号シールを新たに作成し、用度課にて各部署の現物に貼付することにした。

【結果】平成23年10月以降の医療用器械備品は全てシールを貼り替え、それ以前のはMEセンターのシステムに固定資産台帳番号を登録した。その他器械備品等については用度課にて全て貼付した。

【今後に向けて】固定資産管理を定着させるために、1年に1回各部署に固定資産台帳を配布し現物確認をするようにする予定です。また、購入時の固定資産登録も管理が容易になるよう1セット単位に登録をするように変更しました。職員には会報にて、廃棄する場合の手続を周知し日頃から管理をするようにしております。概ね固定資産を管理する体制はできましたが、この手法を継続することが大切なので関係各課を中心に更に取り組んでいきたい。

一般演題(口演)  
10月17日(金)